



春燈

2016
September

9
月号

主宰の句

安立公彦



籐椅子に寸暇やすらぐ敦の忌

伸びやかに育つ青柿古里道

団扇手にとほき端居の父憶ふ

手花火に蘇りくる昭和かな

身の裡の熱きが消ゆる土用波

十一面観音秋惜しまざる相はなし

『柿の木坂雑唱以後』昭和五十七年

さまざまな役目を負って慈悲に満ち溢れ、人々を救う十一面観音。それは紛れもなく、人並以上に多方面に気配りをする敦先生ご本人のお姿を彷彿させる。

中七は下五を二重否定することにより、観音像の十一面をより際立たせ、抒情を深めた。

老境を迎え、静かな祈りに胸中を吐露する師の寂寥感が、ひしひしと伝わって来て、共感を覚える。

卜部 黎子

子離れのさびしき軽鳧が泳ぎをり

『柿の木坂雑唱』昭和五十四年

「清澄庭園」と前書がある。親子連れの軽鳧が、今は子離れし、ひたすら泳ぐ光景から、子を思う親心の切なさを情感豊かに詠んでいる。また〈子の所帯まだ見にゆかず水草生ふ〉のように敦先生には子の句が多い。

子の独立は親の喜びでもある反面、手が届かなくなり、離れて見守る親の愛憐の情は計り知れない。

平明な言葉の奥に深い情愛、温もりを感じた。

高 埜 良 子

燈下集



○ 乱世に遠き皇居や大緑蔭

かき氷ひとりに余し夫恋し

夫の忌に集ふ円卓灯の涼し

夏帽子ぺちやんことなり大抱擁

友情や蛍のごとくまたたきて

○ 平野加代子

○ 田嶋洋子

青梅雨や主治医のあとに研修医

薺の香の身ぬちに風を入れにけり

表札の夫婦別姓五月晴

紙魚迷ふ老後見定め捨つるもの

改築す墓の住処を安堵して

○ 菅澤陽子

声かけて父母に新茶を供へけゆ

到来の実梅に仕事増えにけり

よき師ありよき友ありてさくらんぼ

竹筒入り冷酒に昼の酔少し

料亭の引上げ湯葉や灯の涼し

○ 小泉三枝

滝である限り現在進行形

いつはりの愛に疲れし夜の薔薇

心なき言葉戻らず水中花

叱らるる子の舌真つ赤かき氷

梯梧は血の色よ沖繩慰霊の日

○ 白神知恵子

尺蠖の少し思案の節目かな

玉葱刻む母に幼子もらひ泣き

祭ずし嫁に言ひ継ぐかくし味

箒目を乱して寺の蟻地獄

梅雨晴や歩道絵タイル色めける

○ 長谷川歌子

更衣風は木綿の肌ざはり

十葉の匂や人に好き不喜欢

さりげなくチップや老いの生ビール

ノクターン聴く席の軒や宿浴衣

敦盛草ひそと鎌倉文学館

○ 佐々木良玄

いつからが晩年ならむ冷し酒

べらばうめところてんなんぞ噛まず食へ

母の世の暮しに蜜豆などあらす

玉葱が軒に吊され家富めり

旧道は藏も崩れて藜ばかり

○ 金山雅江

桜桃の一粒づつの自己主張

なんぢやもんぢや咲くや幼子話初む

子を持たぬ娘の言ひ分や莢えんどう

消灯の病室包む五月闇

梅雨晴間卒寿の父のハーモニカ

○ 太田佳代子

夏至の日やバス降りてゆく人の列

足早の人波にひらく日傘かな

緑蔭のごとき主治医の部屋に入る

まぎれなき石榴の花の朱さかな

通院の街見慣れゆく晩夏かな

○ 久保久子

六月の水の匂や厨の灯

序破急の果ての人生明易し

青梅雨や西方浄土絵解き図会

紙魚喰らふ古地図の海の深さかな

浄土への道はいづこや雲の峰

風に舞ふ鳳凰古木花盛り

白韓の黒人神父鳳凰花

ふる里に錦を飾り仙草氷

夕焼や何時もおくれる田舎バス

古稀喜寿の扱き使はるる関羽祭

○ 廖 運 藩

こだはりの初案ともかく麦茶のむ

老いゆくを逆手にとりぬ立葵

肝炎ウイルス消滅梅雨晴間

薫風や原つばのありし東京市

遠雷やシンク磨ける妻の黙

○ 生 方 義 紹

単線の車窓明るき植田かな

よそゆきの顔して墓の通りけり

高原の風乗りこなす夏燕

青梅やころりころりと物忘れ

女子力に足す香水のひとつづく

○ 久 米 憲 子

サングラス恪気の目元隠しけり

涼しさや加賀金箔の化粧紙

風鈴や暮れ残りたる波がしら

衰へし膝に手を置く猫や半夏雨

甘噛みをおぼゆる猫や半夏雨

○ 小 倉 陶 女

風涼し川音近き翁句碑

篝火に闇動き出す鶉舟かな

日鬚の風折烏帽子名鶉匠

鶉飼果つ水の匂の元の闇

よき旅の終りの髪を洗ひけり

○ 荒 井 慈

声だしの雀せはしく明易し

走り梅雨飛脚印の宅配車

梅雨じめり野菜大きく刻みけり

葉隠の青梅知らぬ濁世かな

こぼたるる昭和の家や蚊帳吊草

○ 佐 渡 谷 秀 一

当月集

安立 公彦選



○ 石橋 邦子

文月の句碑立つ寺領敦の忌

夏籠の僧の念珠や路地の風

草のぼる鎌やはらかき子かまきり

下総の波の青さや水鶏鳴く

寂聴の宇治十帖や青簾

○ 齋藤 晴夫

初々し白浅葱色四葩咲く

水の化の紫陽花の藍雨を呼ぶ

独りぼりちの雀迷子か走り梅雨

朝刊に新樹の木洩日遊びをり

白といふ色の深さや月の百合

○ 大森 道生

夜の更けて瀬音高まる鮎の宿

ねぢ花の想ひのたけに身を振り

向日葵や鉄路の歪む昼下り

滔々と走る疎水や風薫る

笹の子を手折らば遠き山の声

○ 佐藤 博重

接岸のロープを受くる青嵐

船笛に海月浮き来る日和かな

梅雨晴や煉瓦倉庫のレストラン

記号めく舳ひ結びや土用波

潮騒に聞き入つてゐる立葵

○ 海村 礼子

掛軸のひらがな文字や竹落葉

夏至夕べ働く母の背しのぶ

沙羅の花輝く日の出浴びにけり

夏山の麓を走る貨車連綿

宿浴衣身丈まちまち同窓会

春燈の句

安立 公彦選

国のため逝きし夫や青すすき

東京 吉田とよ子

悲しみを独り堪へ来し芥子の花

洗ひ髪こころの澱の解くるかに

在りし日の夫とのテニスさくらんぼ

器から脚のこぼるるさくらんぼ

東京 小林文良

ひんやりと海月のいのち燃ゆるかな

定齋屋来さうな路地や日の差し来

ゆつくりと雲流るるや青簾

抽んでて氏の矜恃や古代蓮

埼玉 茂木 なつ

夏桑や唱歌で下校昭和の子

本尊の標や菩提樹の花あかり

見はるかす赤城の機嫌植田風

青胡桃いづれ恋するときも来る

バンコク 大口 堂遊

冷酒や恋は暫く後回し



つつましきピンクに秘むる日日草

熱帯の住まひや甚平有難し

みちのくや五百羅漢に苔の花

不死男忌の雨にくちなしかをりけり

残照や青鷺水に立ちつくす

とび魚やいつしか消えし浜言葉

賤が屋に流るる月日梅は実

葎切やむかしの恋は人知れず

青葉木菟消息遂に絶ゆるまま

美しく老ゆるはゆめや日日草

芝庭に憩ふひととき夏の蝶

浴衣縫ふ母の指先見つめをり

久に会ふ孫の背丈やソーダ水

うすものやピカソに見入る二人連れ

千葉 鶴岡 紀代

埼玉 中里よし子

東京 佐藤まさ子

余言

安立公彦

風の香や工房に幣ゆれみたり

西川 保子

「出雲・出西窯」の前書がある。「風の香」は薫風。この一連の句は陶工の現場での作品。他に「梅雨近し火入れを待てる登り窯」の句があるように、この工房は陶磁器の製造原料となる良質の粘土の産出地にあるめだろう。

工房を占める初夏のやわらかな風、白い幣が爽やかに揺れている。折々鳴く時鳥に主の陶工は仕事の手を休める。粘土の産出地ともなれば、聚落から遠く陶工にとつては人界を離れた聖地である。白い幣がそれを象徴している。

「登り窯」の句は、火入れを待つ陶工にとつては、最も緊張する沈黙の刻を、みごとに表現している。

真つ直な道に疲るる麦の秋

三上 程子

俳句には象徴詩の一面がある。対象を忠実に写したと見られる作品でも、別の見方をすればそこに深い意味の存在を探ることが出来る。俳句の魅力はその多面性にある。

この句、「真つ直な道に疲るる」をどう解釈するか。文字通り麦畑の中の長い一本道ととるか、その「道」に人生を重ねるか。この句を見る人は、その夫それに自身の思考を思い巡らすことだろう。その思いはまたその人のその時の場面により、その何れともなろう。そして結局「道」に人生を重ねるのが、大方の思いではなからうか。

遠蛙ふるさと痩せてゆくばかり 近藤 牧男

人には誰しも故郷がある。幼い頃の故郷は私にとつては、山河に囲まれた地であった。やがて都会に出て自身家を持つと、子供にとつてはその家の在り処が故郷となる。当然のことながらその当然さを素直に受け入れられない思いもある。故郷とは必ずしも生地のみではないとも言えよう。この句、この「ふるさと」は右に述べた字面の上だけのものではない。もつと大きな意味の「ふるさと」である。人に故郷があるように民族にも当然「ふるさと」はある。「ふるさと」痩せてゆくばかり」は、民族衰亡の危機を訴えているとも受取れよう。これは作品の一つの余韻である。

夏柳夜は紅灯の勇歌碑

木多美美子

京都周遊の折の作品。この「勇歌碑」は、へかにかくに

祇園は恋し寝るときも枕の下を水のながるゝの歌碑である。余りにも知られた歌であるが、吉井勇の代表詠の一つであることは言うまでもない。手許の『アサヒグラフ増刊昭和短歌の世界』には、深川不動での團欒の中で（長田幹彦、久保田万太郎他と写した吉井勇の写真が出ている。時に勇三二歳。勇は万太郎の三年先輩で三年早く逝く。

この句、「夜は紅灯の」が無理なく祇園を表している。更に「夏柳」の季語が適確だ。思いの膨らむ作品である。

箒目を乱して寺の蟻地獄

白神知恵子

解説書によると、蟻地獄は寺に多いとある。記憶を辿ると、子供の頃寺域でその巢を棒で荒したことがあったかも知れない。寺の雛僧がきれいに掃いた境内、そこに薄翅蜻蛉の幼虫が穴を掘るのだ。雛僧の怒る顔が見えてくる。

この句にはまた、言葉の対比という面白さもある。寺は仏を祀るところ。そこに蟻地獄の語はかなり印象深い。また一センチにも満たない幼虫が、成長するに及び、蜻蛉にも似た薄翅蜻蛉に変身するのも自然界の妙である。

六月の水の匂や厨の灯

久保 久子

六月という言葉には、例えば開花を待つ佳木のような語感がある。初夏、晩夏に比べ、仲夏という語感はいささか

ひそやか過ぎよう。しかし六月こそ果実は成長に備え、昆虫は羽化する。新緑は万緑への彩りを深めるのだ。

この句、「水の匂や」が、「六月」を受けて揺るぎない。如何にも六月という季節感を憶える。同時に、「厨の灯」の示す生活の潤いが、読む人に安らぎを与える。

こぼたるる昭和の家や蚊帳吊草

佐渡谷秀一

「こぼたるる昭和の家」は、現在多くの地域で見られる景である。昭和と言っても、戦前二〇年戦後七一年、この「昭和の家」は、戦後急造された家々を含む木造家屋だろう。その多くはすでに撤去され、景観を異にしている。段たれた跡地には、他の雑草と相俟って一面に蚊帳吊草が茂っている。強烈な夏の日差しを受けて、蚊帳吊草は緑影を深くする。昭和は愈々遠く去ってしまったのだ。

梅雨寒や熱盛する宿場町

中村紀美子

「熱盛」は熱湯をくぐらせて熱くした盛蕎麦。旅の昼餉には手頃な一品だ。「宿場」は宿駅。街道筋に旅客を宿泊させる所。その宿駅に伴う集落を宿場町と言った。

作者は今しその街道を歩く。折からの梅雨寒に、「熱盛する宿場町」が如何にもふさわしい。十七文字に無理と無駄がない。こういう街道を歩いてみたいものだ。